2020年度後期のハイブリッド授業についての覚書
——資格英語IBを例に

牟田有紀子

1年間のオンライン授業を振り返ってみて，まず頭に浮かんできたのは，未曽有の事態の中でもモチベーションを保ち続け，一生懸命勉強してくれた学生への感謝である。頑張ってくれる学生がいたから乗り切ることができた。これは間違いない。

とはいえ正直，機械類は好きではない。その方面に詳しい方のオンライン授業のやり方をインターネットで調べてみたけれどよくわからないし，便利そうな新しいデバイスを買おうにも売り切れていることも多かったし，自分に使いこなせるかも自信がなかった。そこで，既に持っていた物で素人にもできることを考えた。ここでは資格英語IBを例に挙げて，付け焼刃ながらもハイブリッド授業で実践したことについて書き記しておきたい。

資格英語IBは，TOEICテスト対策の入門レベルの選択科目である。当初は完全に対面形式で授業をする予定だったものの，諸般の事情により教室での受講とオンラインでの受講を選べるハイブリッド授業となった。金曜の1，2限で同じ科目を開講したが，それぞれの受講者数は30人前後，教室での受講者は1限が1割，2限が3割といったところだった。

ハイブリッド授業をやるとなったとき，一番頭を悩ませたのが，どのようにして教室とオンラインで同時にリスニング音源を聞かせるかということである。また，できるだけデバイスの切り替えで時間をロスしたくないし，黒板と同じように色々書きたい。加えて研究室から簡単に持ち運べるものでないと困る。そこで活躍したのが，PowerPointとiPadとApple Pencilだった。具体的には，下記の機器を使用した。

1. ノートパソコン（Surface Pro4を使用。決して新しくも高スペックでもないため，よくぞこの重労働に耐えたと褒めたい。）
2. iPad（第7世代128ギガ）
3. Apple Pencil（第1世代）
4. 大昔に使っていたiPhone 5s
5. パソコンと教室のスクリーンおよびスピーカーを接続するHDMIケーブル

なお教室には自動昇降スクリーン，プロジェクタ，スピーカーが設置してある。ありがたいことにWi-Fi環境も悪くなかった。

前段階として，PowerPointに学生に聞き取ってほしい部分のスクリプトを書き込み，必要な音声ファイルを貼り付ける。それをOneDriveに保存して，iPadで立ち上げられるようにしておく。

教室では，まずパソコンがホストとなってZoomを配信し，そこにiPadも参加者として入室する。パソコンで「複数の参加者が同時に共有を可能」を選び，PowerPointを立ち上げたiPadの画面を共有する。スピーカーは教室に設置してあるものを選択する。HDMIを通して，教室のスクリーンにもオンラインの画面にもPowerPointが映るし，PowerPointの音声が両方に流れる。あとはiPad上で音声を再生し，学生に聞き取ってもらって，解答や大事なポイントをApple PencilでPowerPointに書き込んで授業を行う。黒板だと書くところがなくなったら消さなければならないが，この方法だと書き込む場所がたりなければPowerPointのページを追加すればよい。後でもう一度見せてほしいと学生に言われても困らない。文字が小さいと言われたらピンチアウトすれば良い。実際に，学生の画面がフリーズしたり書き込みが間に合わなかったりしたときに，もう一度見せてほしいという申し出があったが，スムーズに対応することができた。

マイクは特別なものを使わなくても，パソコンの内蔵マイクで十分教員の声を拾えているようだった。オンラインの学生が答えるときには，学生の声は教室のスピーカーから流れてくるようになっているため，教室内での意見の共有も容易だった。

カメラはパソコン内蔵のものでも構わなかったのだが，斜め下から映されるのは不本意であるし，オンラインの学生にとっては常に教員が見下ろす目線で写っているわけなので，もう使っていないiPhone5sを棚の奥から発掘してきて，300円で買ったアームで教卓に取り付け，教室で受講している学生が見ているのと同じ目線の教員の映像が配信されるようにした。そしてiVCamというウェブカメラアプリを入れて，少々顔色を良くさせてもらった。

後期が始まって1回目か2回目に学生にアンケートを取った。一番コメントが多かったのは，オンラインで手書きの文字が見られることについてである。前期はオンデマンド形式だったため，リアルタイムの書き込みを見せることができなかった。オンデマンドにはオンデマンドの良さがあるものの，どうしても文法事項や簡単な例文などを気軽に書き込めなかったり，テキストのどの部分を指しているのかがわかりづらかったりするのがネックだったが，学生も同じことを感じていたようだ。同じところを見ながら一緒に考えることの重要さを改めて痛感した次第である。

この形式で授業をして感じた最大のメリットは，学生に背中を見せる時間がほとんどないことだ。黒板に書いている間やCDプレーヤーを操作している間は，どうしても学生に背中を向けなければならない。この時間が長ければ長いほど，学生は暇になるし，どうしても携帯電話を見たり友達としゃべりたくなったりしてしまうだろう。

もちろん書き込んでいる間はiPadを見ているが，頻繁に顔を上げて，学生の様子を見たり，アイコンタクトを取ったりできる。今後Zoomの使用可能時間や料金などがどうなるかはわからないが，仮に対面形式になったとしてもZoomとiPadを簡易電子黒板として使用する可能性は捨てずにおきたい。そうすれば，iPadを持ち歩きながら机間巡回もできる。例文や文字での解説が必要な質問が出ても，黒板まで戻る必要はなく，その場で書き込んで学生全員と共有することが可能だ。（ちなみに執筆者が使っていた教室ではAirPlayミラーリングができなかったため，ミラーリングが必要な電子黒板アプリなどを使うことができない。）

機械が得意ではない人間の手作り感溢れるハイブリッド授業だったが，これはハイブリッド授業だったからこそ得られた知見であった。今回学んだことは，学生とコミュニケーションの時間を増やし，教員に声をかけやすい教室を作るために活用していきたい。